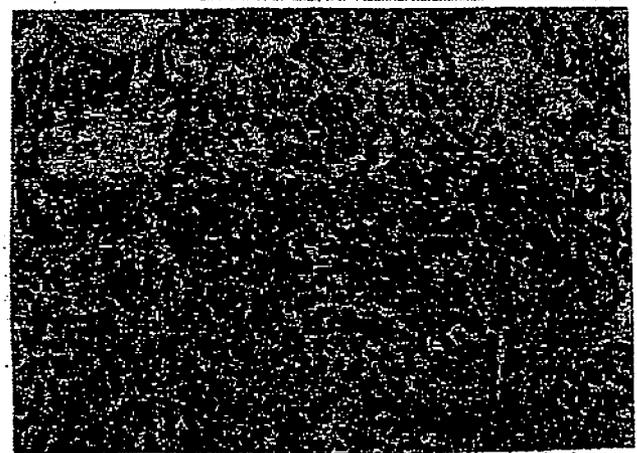
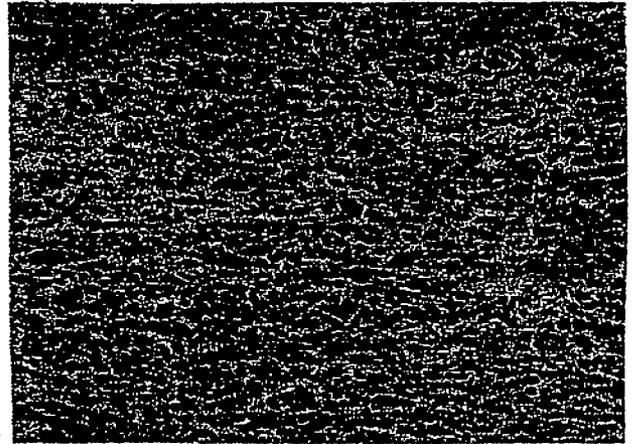
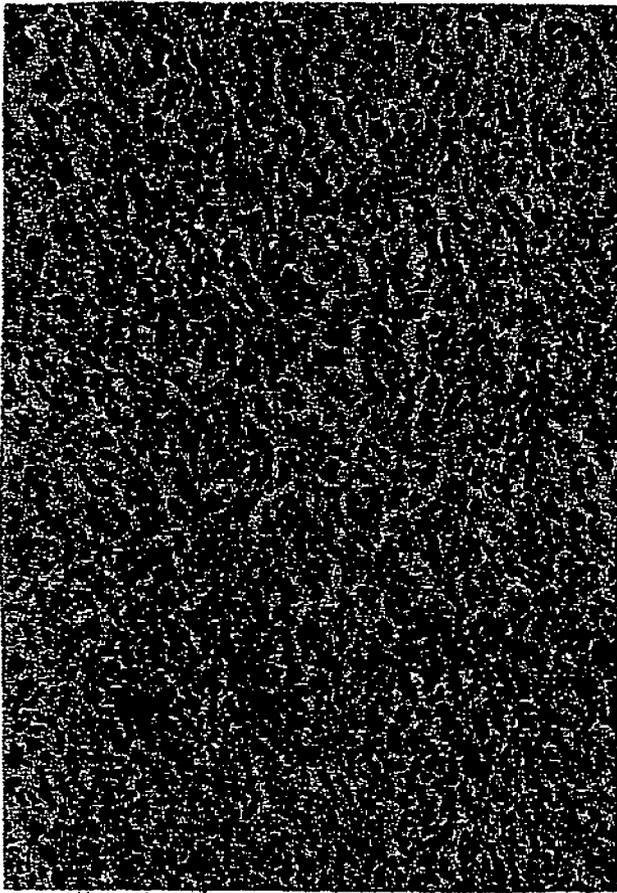


猫の肝原発性血管内皮性肉腫

山口大学農学部家畜病理学教室 第14回獣医病理学研修会標本 No.204



材料および肉眼的所見：在来種の猫10才，雌（卵巣摘出）の肝に発生した腫瘤。昭和47年に卵巣摘出手術をうけた当時はとくに異常はみられなかったが，翌48年5月21日上診の際，腹腔内に鳩卵大の腫瘤を触知した。該腫瘤の発育は速かで，同年11月24日，食欲不振，腹囲膨大が著しくなったため試験開腹し，肝に密着した腫瘤を確認，摘出不能のためそのまま閉鎖したがその直後に斃死した。斃死後直ちに再開腹し，臓器を屍体から切離さずにそのままホルマリン液に浸漬した状態で3日後に提供された。腹腔内の腫瘤は，新鮮時における色調は不明であるが，肝左葉辺縁に隆起した表面凹凸不整，灰白～暗灰色を呈する限界明瞭なまくわ瓜大のもので肝包膜に包まれている。剖面を作ると拇指頭大～鶏卵大に分葉し，中心部の大半は壊死乃至出血巣によって占められているが，辺縁に灰白色の比較的充実した組織が残存し正常組織との境界は明瞭である。横隔膜，腹膜には小指頭大～拇指頭大有柄の球状腫瘤が数個みられたがいずれも脆弱不透明な壊死性の組織であった。肝の他の葉およびその他の諸臓器には肉眼的に著変はみられなかった。

組織学的所見：円形乃至紡錘形の，核が濃染し細胞質

に乏しい細胞が一見無秩序に増殖しつつあるような所見（写真1）とレース状に配列した（いわゆる Kaposi's sarcoma 様）所見（写真2）を示すところが大部分を占めるが，いずれの部位でも毛細管様管腔を形成する傾向がうかがわれ，一部では上記細胞が数層に内張りした比較的広い腔所に組織球性の大型単核細胞の出現もみられる（写真3）。核分割像も散見された。肉眼的には正常部との境界は明瞭であったが，結合織性の被膜はみられず，腫瘤組織は類洞に沿って浸潤増殖する像がみられ，その附近には残存する肝細胞索や個々の肝細胞もみられた。腫瘤細胞の周囲には好銀線維の新生は不明瞭で，全体に形成された管腔内には血球は乏しいが，部位によっては赤血球を容れる管腔もみられた。また壊死あるいは出血の傾向の極めて強い腫瘤組織のように思われた。以上の所見から本例は，肝に原発した血管内皮性肉腫（あるいは悪性血管内皮腫）と診断した。

附記：横隔膜，腹膜にみられた腫瘤は核の染色不良のため詳細な検査はできなかったが，細胞の配列状態などが肝に発生した上記腫瘤と同様であるため，肝原発腫瘤の播種性あるいは接触性転移巣と考えられる。